

## 1. 教育の責任

日本語・日本語教育担当の教員として、日本語教員養成課程内の授業に加え、留学生への日本語教育を担当している。加えて「キャリアデザインⅢ・Ⅳ」の担当教師として、1年生への初年次教育も担当している。また、短期大学の留学生日本語コースのコーディネーターとして、日本語の授業全体のコースデザインも担当するとともに、通信教育課程の日本語教員養成課程のコーディネーターも担当し、スクーリング科目の「教育実習」と卒業論文指導を担当している。

2024 年度の担当授業は以下のとおりである。

### <春学期>

「キャリアデザインⅢ」「日本語教育における言語と心理」「多文化社会コミュニケーション論」「日本語総合 BⅠ（2 クラス）」「日本語作文上級Ⅰ」「日本語総合演習ⅠC（短期大学授業）」

### <秋学期>

「キャリアデザインⅣ」「外国人に教える日本語」「社会言語学概論」「日本語総合 BⅡ（2 クラス）」「日本語総合演習ⅠE（短期大学授業）」「日本文化・アジア文化研究（オムニバス）」

## 2. 教育の理念

大手前大学のディプロマ・ポリシー（2024 年度時点）に賛同し、学生の以下の能力の向上につながる授業を心掛けている。

・専門分野における知識と以下に示す 10 の能力を修得し、それらを駆使して思考し、決断し、行動して社会に貢献する。

(1) 社会性基盤能力：チームワーク、社会的責任能力

(2) 思考基盤能力：創造力、計画力、論理的思考力、分析力

(3) 行動基盤能力：コミュニケーション力、プレゼンテーション力、リーダーシップ、行動力

・自ら問題を発見し、多様な人々と協働して問題を解決する。

・豊かな人間性、高い倫理観および社会的責任感を有する。

日本語・日本語教育担当の教員として、学生の当該分野の知識と技能を伸ばすことと上記の能力を伸ばすことは両立できると考えている。なぜなら、日本語教育という分野自体が上記の能力すべてが必要な分野だからである。

## 3. 教育の方法

授業科目によりやり方、教え方は様々なので一概には言えないが、講義科目であっても、受身型ではない、参加型の授業を心掛けている。具体的には、「日本語教育における言語と心理」「多文化社会コミュニケーション論」では、グループ・ディスカッションを積極的に取り入れ、「外国人に教える日本語」ではワークシートを用いた日本語の文型分析や初級日本語授業のデザインづくりの活動を行い、「社会言語学概論」では el-Campus のディスカッション機能を活用し、講義中にメモを書かせ、それをクラス全体で読み合い確認するといった活動を取り入れている。また、「日本語総合 BⅠ、BⅡ」「日本語総合演習ⅠC、ⅠE」「日本語上級作文Ⅰ」といった留学生対象の日本語の授業においても、ニュースビデオを見せた上でそのテーマについて議論し、レポートやスピーチにまとめるといった活動を行っている。

すべての授業において、授業で使ったパワーポイントや資料は毎回、el-Campus にアップし、学生が後から見直すことができるようにしている。課題や教室活動で使用したワークシートなども、すべて el-Campus を通してダウンロード、アップロードするようにしている。

## 4. 教育の成果

授業評価アンケートの結果を見る限り、担当している日本語教員養成課程関連科目についての学生からの評価はそれなりに高いと言える。授業見学していただいた同量教員からの評価もそれなりに高い。将来の進路として日本語教師を考えるようになった学生も出てき

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際日本学部 名前：松本 剛次 作成日：2024 年 12 月 16 日

ている。留学生に対する日本語科目については「日本語上級作文Ⅰ」についてはレポートの書き方を十分に学んでいないまま本学に編入してきた学生が、それなりのレポートを書けるようになった。また短大の「日本語総合演習ⅠC、ⅠE」においては目標としている N2 レベルに全員を到達させることができた。「キャリアデザインⅢ／Ⅳ」においても多くの学生の GPA を昨年度より引き上げることができている。通信教育課程で担当している教師研修においては、短期間のスクーリングでありながらもプロとして現場に出ていけるレベルにまで持っていくことができています。また指導している卒業論文にも質の高いものが見られる。

### 5. 改善への努力と今後の目標

学部留学生 1 年生の必修科目である「日本語総合 BⅠ、BⅡ」の授業改善が目下の課題である。留学生数の増加に伴い、去年までのシラバスでは付いてくることのできない学生が数多く確認されている。日本語力そのものを伸ばすのではなく、日本語を使っての学力の育成を目指していたが、日本語力そのものがまだまだ大学での学習についていくには不十分なものが多いことが確認できた。来年度は短大のほうの日本語の授業で得たノウハウを生かし、日本語力そのものの育成へと大きく方向転換する予定である。最低でも 1 年次終了時点では N2 レベルの日本語力を持っているようにさせたい。

### 【添付資料】

担当授業シラバス

担当授業学生アンケート結果